

研究概要

全体論

創発のある学び舎

1 研究主題について

(1) 主題設定理由

現在は、社会情勢だけでなく教育改革の方向も大きく揺れ動いている先の見えにくく、変化の激しい現状にある。このような現状であるが故に、人と人、人と社会、人と環境といった「共に生きる」姿が強く求められているといえよう。

一方、学習の主体者である子どもに目を向けてみると、学習の結果得られた知識や技能のみにとらわれがちで、学びの過程を見つめたり対象とふれあう楽しさを十分味わうことができないという姿が見受けられる。また、活動そのものの瞬間的な楽しさを感じているものの、先を見通し、仲間と協力しながらの創造的・生産的活動につながりにくいといったことも指摘されている。さらに、学校内外における問題行動が多く見られるようになってきた。これは既得の知識や経験を自分の中でネットワークさせる力や表現する意欲、よりよい人間関係を築くことに関する意識や経験が乏しいためといえる。このような子どもの姿から、心を開いて対象とつながろうとする資質・能力の育成が以前にも増して必要であると思われる。

私たちは、変動の激しい社会を生きる子どもたちにとって必要とされる学びを明確にした上で、一人一人に合った学習環境の整備をしていくことが、今の学校に求められていると考えている。

そこで、目まぐるしく移り変わる社会情勢や教育界の動向を見据えた新しい学校づくりを提言していきたいと考え、昨年度より「創発のある学び舎」を研究主題としてきた。

(2) 「創発のある学び舎」とは

「創発」とは、個の自発的な営みが全体の秩序を生み出し、その全体の秩序が、また個に影響

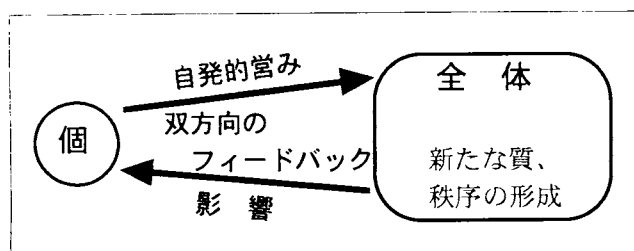


図1 「創発」のイメージ

響を与えるという状態を表す言葉である。それは、個と全体との双方向のフィードバックを意味したり、あるいは、複数の要素が集まり混沌とした状況から、新しい質が生まれたりする、その状態のことをいう。これは、個と個、個と全体との共存関係を意味している。私たちは、「創発」を「自立」へのプロセスであり、「共に生きる」ことにつながる理念ととらえた。

このように「創発のある学び舎」は、今求められている学校像の一つであると同時に、将来的に附属学校園の連携を考える時、大きな展望となり得るテーマである。すなわち、この共存関係は個同士がいわば相互にとけ合いながら全体をつくりあげ、それがまた個によりよいものとして還ってくる相乗効果をもたらすことになる。それによって、個や全体の新たな変容へとつながると思われる。このように個と全体との双方向のかかわりが活性化され、新たな個、新たな全体が生み出されていくような学校をめざしたいと考えた。そこで、私たちは「創発のある学び舎」を次のようにとらえることにした。

共に生きる中で自ら積極的に個や全体に働きかけ かかわり合いながら新しい自分をつくっていかこうとする活力あふれる学校

2 「創発のある学び舎」の構想

(1) 学びについて

① 学びの対象と目的

学びの主体者である子どもを取り巻く事象は「ひと」「もの」「こと」に類別でき、それらさまざまな事象から、子どもは情報を得ている。その意味で、子どもを取り巻く

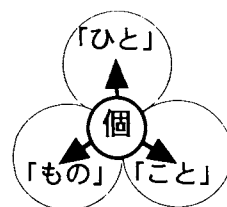


図2 子どもを取り巻く事象 (=学びの対象)

事象すべてが学びの対象と成り得る。そして、子どもが、学びの対象を価値ある対象と認めることができれば、子どもは意欲的に自分からかわり、学ぼうとするであろうし、学びの過程や結果において、自分のよさや可能性を感得す

ることが期待できる。ここでは、学びの対象となる価値ある事象について、教師の思いや願いとともに、子どもの視点に立っての分析が、私たちにとって重要となってくる。

学びとは、自らが対象とする事象にかかわり、自分にとって意味のある価値観を形成していくことである。自分にとって意味のある価値観は、単に学んだことによって得られた知識や技能を指すだけでなく、問題解決方法などの学び方や事象に働きかける意欲や態度をも含んでいる。

このような価値観を形成していくことは、今求められる「生きる力」を育てていくことに他ならない。「生きる力」は生涯を通して獲得していくものであり、これからの社会を生きるために必要な資質・能力である。

学びの目的は、自己の学びによって「生きる力」を育てていくことととらえている。

一方、「創発」から学びを見ると、一人一人が形成した価値観や、それに基づいて事象に対峙した時の新たな思いや考えが絡み合ったりぶつかり合ったりする中で、さらに新たな価値観が生み出されると考えられる。この状態を全体の相互関連の視点で見た時に、子どもや集団としての新たな現れを見出すことができると考える。

② 学びの場

学びの対象から、学問的・体系的見方で構成されたものが「教科学習」（本校では道徳も含み「教科・道徳」としている）である。これに加えて、社会の変化に対応し、学校の独自性が生かされる「総合的な学習の時間」（本校では「総合学習」とよんでいる）と、自主的、主体的な態度づくりの側面を重視した「特別活動」がある。私たちは、子どもと集団がかかわり合ったり高まり合ったりするこれらを、3つの学びの場ととらえている。

3つの学びの場が相互に関連しながら「学び舎」をつくりあげ、それがまたそれぞれの場によりよいものとなって還ってくる相乗効果をもたらす。「学び舎」は「教科・道徳」「総合学習」「特別活動」という3つの学びの場の絶妙なバランスの上に成立するというイメージでつくられる学校の姿と考えられる。

(2) めざす子どもの姿について

「創発のある学び舎」をめざしていくためには、学習形態や方法の面からのアプローチだけでなく、一人一人が自ら働きかけていく存在になるように、子どもの学びの過程を見ていく視点が大切である。子どもは、学びの対象とかわ

りながら経験を積み、自己との対話を通じて体系的な知識や技能、ものの見方・考え方などを身につけていく。その中で、自分の内面に自分の生きるものさしや行動の規準といった価値観を形成し、さらに自分を伸ばしていこうとする意欲が生み出される。これが、子ども一人一人の自発性の現れであり、新しい自分をつくっていくことにつながっていく。

これは、よりよく事象とかわかろうとしたりよりよいものをつくり出そうとしたりしていくことで、よりよい自分を自覚していくという自ら働きかける存在としての自分へのプロセスである。つまり、自分や自分を取り巻く事象と思いや考えを行き来させながら、課題達成に向けて自助努力する学習の過程を通して、自分のよさや可能性に気づき、それを伸ばしていこうとする姿であると考えられる。

以上のことから、私たちは「創発のある学び舎」において、めざす子どもの姿を次のように

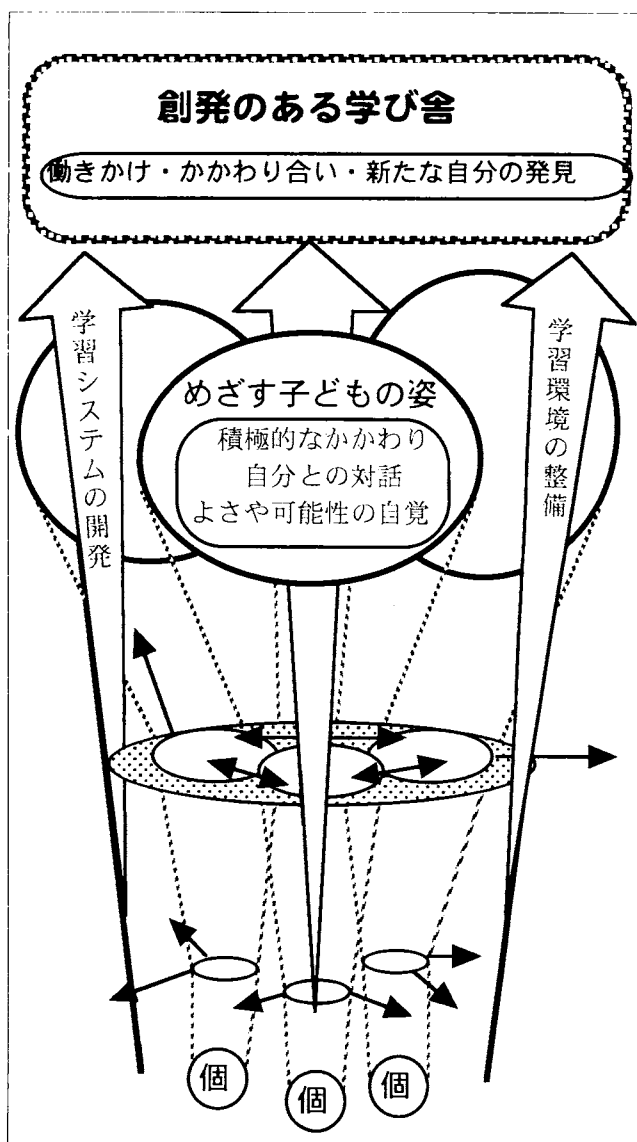


図3 創発のある学び舎イメージ

とらえることにした。

様々な事象に積極的にかかわり 自分と対話しながら 自分のよさや可能性を見つけようとする姿

このような姿が発現していくことで、かかわり合いが活性化され、相互に高まりや深まりを見い出すことができると考え、今年度私たちは、めざす子どもの姿に迫る手だてを追求してきた。

3 めざす子どもの姿に迫るために

子どもにとっての学校（学び舎）とは、将来の目的のために学ぶ場であると同時に、学ぶことそのものの楽しさを味わい、それを集団で共有することができる場である。ここでは、3つの学びの場におけるめざす子どもの姿と具体的な構想について述べる。

(1) 教科・道徳において

① めざす子どもの姿

私たちは教科・道徳において、その本質を学ぶことが大切であると考えている。

本質とは、教科の存在意義であり、生涯学習を意識したものである。そして、学びの対象となる教科独自の「ひと・もの・こと」と深くかかわっている。私たちは、その本質に基づいた基礎・基本を明らかにし、学びを通して、基礎・基本の確実な定着を図りたいと考え、指導にあたっている。

教科・道徳の基礎・基本は、学びの対象に内在する各教科なりの見方で見たときの本質の現れであり、各教科等で取り上げる内容と身につけさせたい資質・能力の両面からとらえることができる。学びを通して、子どもは事象とかかわりながら自分を見つめ、自分のよさや可能性を自覚していくことができる。これが、さらなる意欲を生むことになると考えている。

そこで、教科・道徳におけるめざす子どもの姿を「基礎・基本を確実に身につけていく中で、さらに自ら働きかける姿」とした。

② 学びの場の具体的構想

教科・道徳におけるめざす子どもの姿「基礎・基本を確実に身につけていく中で、さらに自ら働きかける姿」に迫るために、各教科・道徳においても、それぞれのめざす子どもの姿を具体化する（各教科などにおけるめざす子どもの姿は、教科・道徳の理論と実践編を参照）。それぞれの教科・道徳の「本質」を生涯学習を意識しつつ、めざす子どもの姿に迫る各教科な

りの手だてを明らかにし、その手だての有効性を検証していくことにした。

めざす子どもの姿に迫るための方策は、各教科の特性によるが、特に「自己評価活動」は、昨年に引き続き全ての教科の単元の過程に位置づけることにした。それは、自分のよさや可能性を自覚し、さらなる意欲を生み出すために有効と考えられるからである。

尚、生活科については、教科の特性を重視しつつも他教科や総合学習の各領域とのかかわり、さらに幼稚園との連携も視野に入れて、本校ならではの内容を検討し実践していくことにした。

(2) 総合学習において

① めざす子どもの姿

社会の変化に伴い、様々な今日的課題が取り上げられてきた。例えば、環境にかかわること、異・自文化理解にかかわること、情報化社会にかかわること、福祉・人権にかかわることなどである。それらの諸課題を真摯に受け止め、向き合い、自分のあり方や生き方を自己の内面に問いかける場が求められている。

一人一人の価値観は多様化してきたが、教養形成の視点から新しい時代を生きる人間として「共に生きる」ことは今後益々尊重していかねばならない。共に生きていく社会や環境づくりのためには、よりよい社会、よりよい環境、よりよい人間関係といった「よりよく」という前向きで積極的な姿勢が求められてくる。

以上のことから、21世紀を生き抜く子どもには、一人一人が自分の身近な社会や環境を、さらには、自分自身の内面をもしっかり見つめ、「自分はどうかかわり、どうはたらきかけていけばよいのだろうか」と考え、判断し、行動・実践していくことのできるようになってほしいと願っている。

そこで、総合学習におけるめざす子どもの姿を「共に生きる社会や環境に自らかかわり、よりよい生き方を求めようとする姿」とした。

② 学びの場の具体的構想

総合学習では、子どもが自ら強い意志やこだわりを持って行動していくことが望まれる。そのためには、子どもの実態に応じた事象や素材を厳選し、子どもの思いや意志が反映できるような単元を構想していきたい。体験を通して実感できるように、学習活動の保障および環境の整備をしていく。その中で、とり上げた内容に内在する今日的課題や問題意識にかかわって、一人一人が価値を獲得し、価値観を形成してい

くことを大切にしたい。

ア 総合領域

総合学習は、教科の学びが基盤となることはいくまでもないが、問題解決の過程を自分なりに模索することや自分の生き方を見つめ直していくことも大切である。総合領域では、今日的課題とした「人間」「環境」「文化」の視点を大切にしながら、内容や方法、素材や活動を考慮し、主に学級単位で年間計画を立てて、進めている。

単元を設定するにあたっては、共に生きていく社会や環境づくりのために次の三つを大切にしていく。一つ目は、この社会や環境の中に存在する「ひと・もの・こと」を尊重することである。二つ目は、これらは、決して単独に存在するのではなく、互いに関連を持ちながら在ることに気づかせることである。そして、三つ目は、さらに「よりよく」という前向きで積極的な姿勢で、「自分はどうかはたらきかけていけばよいのだろうか」と考え、行動・実践していく単元を構想することである。この三つをもとにした学びの積み重ねによって、自分を取り巻く事象を尊重する意識やつながり、はたらきかけが深まって、「ひと・もの・こと」との新たなつながりやはたらきかけを求めようとする姿に変容していくことを期待している。単元によっては学年合同や小テーマ毎に集団編成するなど学習形態や学習方法を工夫している。

尚、中学年では年間約65時間、高学年では約45時間の計画とした。

イ かしわ選択ゼミ（以下、選択ゼミ）

私たちは、子どもが自分らしさをより発揮しようとする場として、併せて新しい自分を見つけていく場として、選択ゼミを位置づけた。ここでは、自らの学びを獲得していく中で、子どもが本来持っている知的好奇心や探求心、科学する心（目）を拓くことをめざしている。子どもは、教科・道徳や総合領域とともに、選択ゼミの学びにおいても、学び本来の楽しさや意義を感じるにより、自分のよさや可能性を自分の特性の一つとして知ることができると考えている。

選択ゼミでは、教科・道徳の基礎・基本に迫る方策や総合領域での三視点も生かしつつ、子

どもにふれさせたい未知の世界や人間性（例えば、教師や、ここで取り上げる「ひと」の生き方やこだわり）を子どもに出会わせる場とした。それぞれのゼミで取り上げる学びの対象について、視野を広げたり新たな視点を持って臨んだりすることや自分とのかかわりの中で見つめなおすこと、さらに学び方や学んだことが将来何らかの役に立つことという観点も重要視している。そこで、選択ゼミで取り上げることは教科や総合学習の発展的なもの、生涯学習につながるものを各教科毎に考えてきた。

また、今年度は、その対象を5、6年生（約230名）とし19のゼミ（前期）を開設した。それは、少人数体制で一人一人の学びに応じた学習を展開するとともに、これまでに総合領域や教科・道徳で培ってきた学びをさらに広げ深めることをめざすことができるようにするためである。

教科などの発展としては、まず、内容面での見方が考えられる。指導要領の改訂で小学校の学習内容が見直されたが、今の子どもに是非触れさせたいもの、中学校以上の学習で取り上げられるものといった内容が考えられる。

さらに、選択ゼミでは、多様な学び方（学習形態・方法など）が経験できたり、様々な人的・物的な素材や教師のこだわるもの・こととかがわたりすることができる。それによって、いろいろな学びにふれることや資質・能力に広がりや深まりが見られることも発展ととらえることができる。ゼミの選別せ方や実施時間などの運用面での改善の余地は残されているが、ここでの学びが教科・道徳や総合領域に生かされたり、逆に教科・道徳の等の学びを選択ゼミに生かしたりすることで、今後新たな学びの場を創造することもできると考える。

このようにして考えると、現在行っている選択ゼミの利点として以下のことが挙げられる。

- ・選択ゼミは、それまでの教科・道徳や総合学習で培った学びを専門的に見たり、洗練させたりしたものである。
- ・少人数体制で行うことにより、集団としての学び合いや個々の充実感といった視点で子ども同士や教師が一人一人の伸びに敏感になれる。

低	英語活動 15	(注) 低学年の英語活動は、特設の時間で行っている		
中 105	英語活動 30	情報機器 操作10	総合領域 65	
高 110	英語活動 30	情報機器 操作10	総合領域・選択ゼミ 70	

図4 総合学習の割り振り

- ・自己の選択によってそれぞれのゼミで学ぶ子どもが、学級集団に戻った時に、より深まり、より広がった学びをその集団で融合することができる。

尚、選択ゼミは一年間を前・後期の二期制とし、5、6年の2年間で4回の選択機会を設定している。前後期合わせて、28時間行うこととした。

ウ 英語活動

昨今、英語活動についての様相を見ると、著しい進展を見せている。英語教育関連施設の急速な普及状況から考えると、国際化はますます広がり、現在以上に英語の必要性は高まるであろう。

本校では、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標に、ALT（英語指導助手）を5名に増員し、彼らとのコミュニケーションを中心にした形をとることにした。より一層英語に慣れ親しむことができるように、今年度は、これまでの実践を生かし、カリキュラムを一部修正・改善した。そこで、低学年は年間15時間、中学年以上は30時間の活動を確保し、英語とふれ合う時間を昨年度より多く設定している。子どもは英語のシャワーを浴びるような活動の中で、英語によるコミュニケーションも自分の思いを伝え合う一手段ととらえることができると思う。

尚、英語活動は、低学年は特設の時間で、中学年以上は総合学習の時間内で行っている。

エ 情報教育

今後益々進むであろう高度情報化社会のことを考え、生涯学習という視点からみても情報機器の活用が必要な場面も多くあると思われる。そこで本校の情報教育では、読み取る力と表現する力を連動させ、その向上をめざしている。

今年度はコンピュータ、デジタルカメラ、デジタルビデオカメラといったメディア機器の操作スキルの習得に重点を置いた情報教育指導計画を策定した。各学年で年間5～10時間を子どもの実態に応じた機器の操作習得の時間として総合学習の時間内に確保している。そして、メディア機器の効果的な活用をカリキュラム上位置づけたり、教科などにおける情報収集・発信などの表現手段の選択肢の一つとしたりして、本校の情報環境を生かしていきたい。今後、各教科や総合学習との関連が進むように、情報教育の在り方を検討する必要がある。

(3) 特別活動において

① めざす子どもの姿

学校生活の中には、子どもが自分たちの問題を自らの力で解決したり、自分たちの喜びのために自らの手で何かをつくり上げたり、達成感を感じたりすることができる場が求められる。

私たちは、学校行事や集会的活動、あるいは学級独自の活動などにおいて、子どもが自分たちの学校生活をふり返り、小さなことでもみんなと相談して解決し、自分たちの発想を生かし

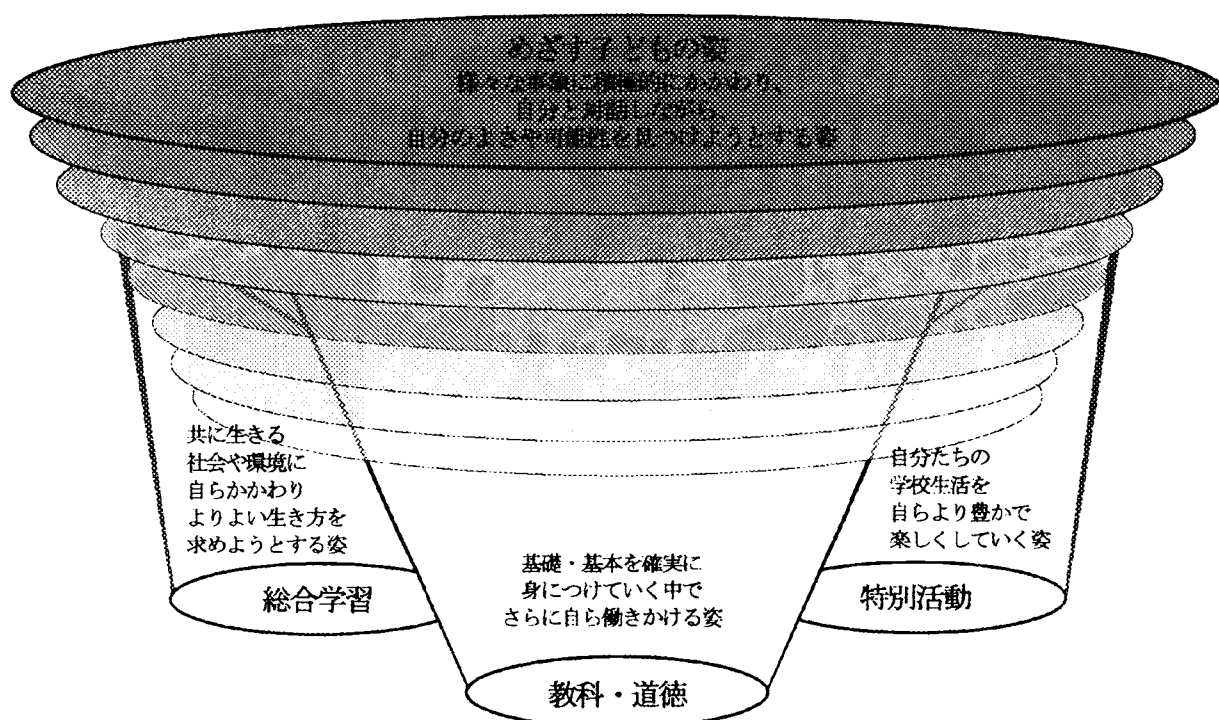


図5 3つの学びの場のめざす子どもの姿とけ合いイメージ

て、活動を楽しんでいくことができるようになってほしいと願っている。そのために、教師は子ども自身がふり返る場やじっくり考え解決する場を保障したり、子どもの思いや願いを生かすようにするなどの細かな支援をしていくことが求められる。このような支援のもと、子どもが目的意識や先の見通しをもち、粘り強く、創造的に活動したり、仲間と共に生産的に活動したりしていく姿が現れるようになれば、子どもは自分たちの学校生活を一層豊かで楽しいものとして感じるができるであろう。

そこで、「自分たちの学校生活を自らより豊かで楽しくしていく姿」を特別活動におけるめざす子どもの姿とした。

② 学びの場の具体的構想

特別活動では与えられたものを甘受するだけでなく、一人一人の意志を尊重しながら、子どもの思いをできるだけ実現できるような場としていきたい。集団活動では、自分のことだけでなく他のことも考えなければならない。時には主張し、時には譲り合いながら互いの個性を尊重し合う態度とともに、協力しながら主体的に活動する態度を身につけさせたい。

以上の考えに基づき、特別活動は、教科学習や総合学習とともに大切な学習の場であると考えている。そのため、子どもの実態に合わせて、学校全体で指導に取り組むとともに、研究に関連する部分については具体的に問題提起していくことにする。

③ 児童会活動について

今年度は、児童会活動にかかわることを児童活動指導委員会を中心に具体的な指導内容を検討している。以下では、児童会活動におけるめざす子どもの姿とそれにかかわる主な活動内容について述べる。

児童会活動においては、「学校生活をより豊かにしていくために、何ができるかを考え、実行しようとする姿」「仲間とかかわることを通して、一緒に活動する楽しさや人の役に立つ喜び、協力するよさを感じ、仲間と共に活動する姿」をめざす子どもの姿ととらえている。その姿に迫るために、子どもに人の役に立ったということを自覚させる手だてを考えたり、人に働きかける場の保障とその方法を知らせたりするとともに、子ども一人一人に応じた支援を継続的に行っている。

ア プロジェクトふぞく

この活動は、子ども自身が活動を立案・企画し、4年生以上が参加している。自分たちの責任のもと活動を創造するという点を尊重し、やり遂げる満足感や充実感、新たな活動をつくっ

ていく楽しさをも味わわせたいと考えている。学校行事の児童会にかかわる部分の企画・運営にも対応している。また、日頃の学校生活で気づいた行動面でのよさや問題点を出し合い、学校生活上のできごとを自分たち共有のものとして受け止めるために、広く全校から情報を集め、検討する場として代表委員会を定期的に開催している。

イ たてわり活動

本校の子どもは、居住地域が金沢市全域に広がっており、学校生活以外で子ども同士のつながりが薄い。そこで、児童会活動を中心にして異学年縦割り小集団活動（本校では、たてわり活動とよんでいる）を活用している。6年生にリーダーとしての自覚を持たせるとともに、リーダーを中心に集団の練り上げのよさや楽しさを味わわせることにした。また、生徒指導委員会と連携し、日々の清掃活動にこの集団を活用している。

4 単元や活動を

構想するにあたっての視点

これまで述べてきたそれぞれの学びの場の特性を生かしながら、めざす子どもの姿に迫っていきたいと考えている。実際には、各教科・道徳や総合学習の各単元などで実践していくことになる。

そこで、具体的な単元・活動を構想するにあたっては、それぞれの学びの場におけるめざす子どもの姿をもとに、以下に述べることを主な視点とする。本紀要の教科・道徳編、総合学習編でその具体化されたものを示している。

(1) 一人一人の学びの対象への

働きかけを促す

子どもたちを取り巻く「ひと・もの・こと」に内在する価値を、子どもの視点にたって分析する。それによって、子どもにとって自分自身の課題となるような価値ある対象となる事象を選定する。

そして、子どもがその事象に自発的に働きかける意欲が生み出されるような出会わせ方や提示の仕方などが重要なポイントとなる。

(2) 一人一人の学習の場を保障し、

自分の思いや考えの表現を促す

子どもの思いや考えの中には、それぞれの学びの場でねらいに迫るためのきっかけとなるものもある。そのため、出会った事象に対して、子どもに自分の考えを構築する場を保障しなが

ら、その子なりの表現を促していく。その際、子どもが表現しやすくなるような雰囲気作りを大切にしていきたい。

教科・道徳の基礎・基本を確実に身につけていったり、共に生きる社会や環境の中でよりよい生き方を求めたりすることにつながるような場の設定に心がける。それとともに、子どもが考えを思い通りに表現することのできる子どもが自分の思いや考えを明確化・構造化していくことができるような学習活動を構成する。

(3) 獲得した考えの

共有化を図る場を設定し、

自分の考えの再構築を促す

一人一人の追求活動では、「今自分が追求過程のどの位置にいるのか」「どこまで追求できているのか」「他者との違いはどのようなことか」を自覚する事は大切である。そこで、子どもの追求意欲を尊重しつつ、自分の知識や方法などを相互に出し合う場を設定していく。

さらに、意見の触発や葛藤も生まれるような教師の働きかけによって、自分がそれまでの学びで獲得し、表現したものと全体で出されたものが相互にとけ合い、自分や全体の考えが新たに再構築されることをねらっている。また、自分の追求活動の見通しの再確認が行われたり、追求意欲がさらに向上したりすることも期待される。その結果、追求活動の課題や方法が焦点化され、意味のある価値観の形成につながると思われる。

(4) 自己評価活動を生かし、

自分の変容の自覚を促す

自分の追求過程において今の自分はその過程のどこまで達しているのかを確認することや事象に対して当初の思いや考えを見つめ直すことは、以前の自分と比べてどのように変わってきたかを自覚することにもつながる。これは、自分のよさや可能性を感得していくことであり、さらなる意欲を生み出す。この意欲が、それぞれの場におけるめざす子どもの姿につながる。

そのために、自分の変容の自覚を促す評価を生かす場やその方法について検討し、教師の支援も含めて、学習や活動の中への位置づけを図ることとした。自己評価活動の詳細は次項で述べる。

5 自己評価活動について

(1) 自己評価活動の意義

私たちは、自己評価活動を自分と対話しながら課題達成に向けて努力する学びの過程の中

で、よさや可能性に気づき、伸ばしていこうとする姿に迫る方策の一つとして位置づけている。「生きる力」を一人一人が身につけていくには、子どもが事象とかかわりながら、自ら学習を進め、自分自身で評価できるようにすることが大切であると考えます。

子どもには、自分との対話を通して次なる活動へ向けての意欲を持続、向上していこうとする中から「自信と自省」の念を抱かせたい。自信とは「自分を信頼すること＝自分のよさや可能性を自覚すること」で、自省とは「自分の足りなさを謙虚に自覚すること」である。特に小学校段階では、自信をしっかり持つことができるようにしたい。それは、自信によって自己肯定感が高まり、学びに対してより前向きな姿勢があらわれることが期待できるからである。

自己評価活動では、学びに対する満足感や達成感を自覚したり、自分のめざす姿を客観的に見つめたりする。また、自分のよさや可能性に気づくには、自分で自分を見つめるだけでなく、他者による評価や他者のよさを見つけていく評価も大切である。

子どもの学びの姿を評価するためには、学びの結果だけではなく、その過程における子どもの姿をとらえていくことが大切である。また、自己評価活動が自分を見つめ直し、自らの新たな意欲を生み出す有効な手段となるために、自己評価力の育成も必要である。これらの活動を通して、自己評価力を高めていくことは、自己肯定感の自覚やさらなる学習意欲の喚起につながるものといえる。

(2) 自己評価活動をすすめるために

自己評価力の育成のためには、自己評価活動の機会を設け、その方法や基準を伝えることが教師にとって必要となる。具体的には、学習や活動の進み具合や状況に合わせ、評価活動を行う場として、単元計画中に主な評価ポイントを設ける。それを中心に一人一人に対応した自己評価活動を促していくことにした。その方法として、これまでポートフォリオ的手法、質問紙的手法、チェックリストの活用などで試行してきた。

私たちは、子どもの行う自己評価活動から、自分のよさの自覚や自らの学びの自省の姿がみられたかどうか、さらに、その評価を教師がどのように指導に生かし、その効果はあったのかなどについてに考察していく。それに併せて評価方法についても実際の運用から妥当性や改善すべき問題点等を検討していくこととした。単元や授業評価では、学習集団全体や抽出集団の

様相を中心にしながら、めざす子どもの姿に迫ることができたかの観点をもとに、一人一人の子どもを見つめていく。

各教科・道徳、総合学習の特性に応じた自己評価活動を取り入れ、考察を進めることにした。その実践は、本紀要の教科・道徳編、総合学習編に掲載している。

— 参考文献 —

- 文部省 (1998) 小学校学習指導要領
文部科学省 (2001～2002) 中央審議会答申
吉永良正(1996) 『複雑系とは何か』 講談社
安彦忠彦(1997) 『自己教育力を育てる授業』 明治図書
井上正明(1997) 『「生きる力」の育成と自己評価の方法』 明治図書
金沢大学教育学部附属小学校
研究紀要第47～56集